



「調理」の授業から

2学年支援部 Y.S

本校では1年生から3年生まで「調理」という授業があります。卒業後、家庭生活を営む上で必要な知識や技術を学び、自立に必要な力をつけることを目標にしています。例年、1年間に20回前後調理実習を行うので、入学時は、包丁使いも危うかった生徒が、3年になる頃には、かなり上達します。

「調理」は1年生から3年生まで、授業の流れ、実習室の使い方、当番の仕事、安全面・衛生面に関する細かなルールを統一しています。私は今年2年生の調理を担当していますが、1年時、当番やルールをマスターし、今では手の込んだ題材にも取り組めるようになっていきます。

今回は、「調理」の授業中に見られる、社会性やコミュニケーションという面に触れてみたいと思います。

授業は各クラス単位で、4人ずつ2班に分かれて実習を行います。当番は、「ゴミ」、「道具」、「床」、「流し」の4つがあり、毎回交代して、全ての当番を担当します。(それぞれの当番がどのような仕



事をするのか、お子さんに聞いてみてください。) どの当番も、その仕事がきっちり行われていないと、作業が効率よく進みません。例えば床当番は、共同作業ができるか、どのように試食用テーブルを配置するかが、私の注目しているところです。授業の初めは、調理手順等を確認するので、ホワイトボードに向かって座学ができる形に着席します。実習を始める前に、長机を併せ、全員が顔を合わせて試食できる形に並べ変えます。2人が声を掛け合い、長机を適切な場所に並べられるペアもあれば、それぞれ思い思いに長机を移動させて、なかなか終わらないペアもあります。

調理の前に、必要な道具や食器を用意します。プリントを見ながら、班のメンバー同士声を掛け合い、足りないものを確認しながら用意している班、各自が思い思いに用意している班。速さを競っているわけではありませんが、当然、速さに差が出てきます。

調理が始まると、野菜の皮をむいたり切ったりする作業は、できるだけ全員が担当するように分担します。炒めたり味付けをしたりするのは1人か2人でよいので、誰かが担当することになります。焼いたり炒めたり味をつけたりする作業ばかりをして、洗い物や片付けは人任せ、ということにならないよう、調理実習に入る前に、指導者が作業分担を指示したり、班の生徒達が相談して決めるようにしています。

卒業生ですが、1年生の初め頃、「調理」の授業中に何をしたら良いかわからないので、調理台周辺で行ったり来たりしている生徒がいました。「何をしたいかわからない時(手



が空いた時)は、質問をすることも大切だけど、洗い物があれば、洗い物や片付けをするといい。」と話しをすると、早速実践できるようになりました。本人もすっきりし、班の作業が効率よく進むので、班の雰囲気も良くなりました。

「調理」の実習は、家で自分の好きな様に料理するのとは違います。班のメンバーと協力して、お互いに気持ちよく効率よく進める事が大切です。相手に対して偉そうに言ったり、一方的に自分の都合だけで言っていないか、役割分担は自分の好き嫌いで作業の内容を選んでいないか、いつも自分の意見だけを通していないか、ということ、具体的な場面で学べるよう、生徒に伝え続けていきたいと思っています。

「サンタクロースってほんとにいるの？」福音館書店

(てるおか いつこ:文 すぎうら はんも:絵)

少し早いですが、クリスマスの絵本を紹介します。この本の著者は、バブル経済絶頂期に「豊かさとは何か」(岩波書店)を書いた経済学者の暉峻淑子氏です。この絵本を初めて知った時は、経済学者が子ども向けの本を?と思いました。

二人の子どもがお父さんに「サンタクロースってほんとにいるの?」「えんとつがなくともくるの?」「どうしてほしいものがわかるの?」と次々に質問します。お父さんのユーモラスなこたえの中に、子どもたちへの深い愛情が感じられます。人を喜ばせることは誰にとっても喜びである、そういう心が人間にあることを忘れないでいたい、と思わせてくれる絵本です。

